

試験研究成果普及情報

部門	内水面	対象	普及
課題名：利根川下流域におけるチャネルキャットフィッシュの生態と効率的な駆除方法の検討			
〔要約〕 利根川下流域においてチャネルキャットフィッシュの生態的特性や漁獲実態を調査したところ、雑食であるが成長に伴い動物食性が強まること、季節的な深浅移動を行うことが明らかとなり、効率的な漁獲の可能性が高い。また、利根川と栗山川での年間漁獲は推定 20～30t で、ほとんど廃棄されている。			
キーワード：チャネルキャットフィッシュ、アメリカナマズ、産卵期、食性、駆除			
実施機関名	主 査	水産総合研究センター	内水面水産研究所
実施期間	2002年度～2007年度		

〔目的及び背景〕

近年、利根川において外来種であるチャネルキャットフィッシュ（アメリカナマズ）が急増しており、本種は胸鰭と背鰭の棘が鋭く扱いにくいことから、漁業操業上の障害となっているほか、単価が安いことから、利用されずほとんど廃棄されている。

本種については国内河川での資源生態学的知見がないことから、利根川及び支流の長門川において、食性、年齢、成長、産卵生態などの生態的特性及び漁獲実態を把握し、漁業へ及ぼす影響の予測、漁業被害の軽減対策、生態系保全対策を検討する基礎資料とする。

〔成果内容〕

- 1) 生殖腺熟度指数の推移(図 1)、及び 9～10 月に当歳魚と思われる小型個体が長門川で採捕されたことから、本種の産卵期は 6 月～8 月であり、支流などの浅場に集まって繁殖しているものと推測された。
- 2) 胃内容物は魚類、甲殻類、昆虫、デトライタス、植物など様々なものであったが、全長 500mm 以上の大型個体では動物性の割合が 65% 以上と高い傾向が見られ、成長に従って動物食の傾向が強まっていた(図 2)。また、胃内容物中に観察された魚類の鱗及び骨の大きさから、本種は死魚も餌として利用しているものと推測された。
- 4) 水深測定結果から、水温が低下する 10 月以降に水深 6m 以深の深場へと移動していることが確認された(図 3)。
- 5) 利根川及び栗山川の漁業者へのアンケート結果から、本種の増加は、平成 10 年前後から始まったと推測された。また、H17 における本種の年間漁獲量は 33.3t と推定され、そのほとんどが漁獲後に廃棄されていることが明らかとなった。
- 6) 季節により深浅移動を行う本種の生態特性を利用して、刺網等による効率的な漁獲の可能性が示唆された。本種は食用として輸入された経緯もあることから、効率的に漁獲することが可能になれば、駆除及び食用等の有効利用も可能になると思われる。

〔留意事項〕

〔普及対象地域〕

利根川及び栗山川流域の内水面漁業関係者

〔行政上の措置〕

〔普及状況〕

本成果をもとに、平成 20 年度から、関係漁協が駆除調査を行うとともに食用としての有効利用の可能性を検討中。

〔成果の概要〕

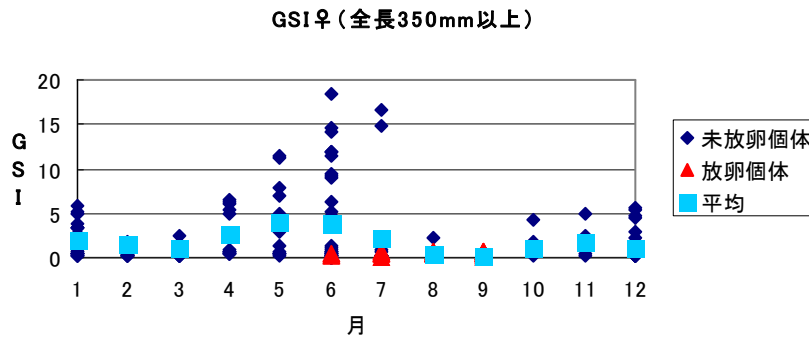


図1. 各月のGSIの推移

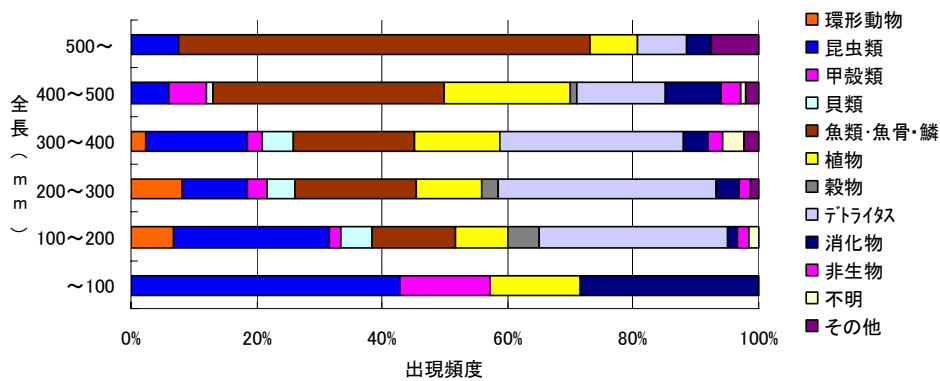


図2. 胃内容物の出現頻度

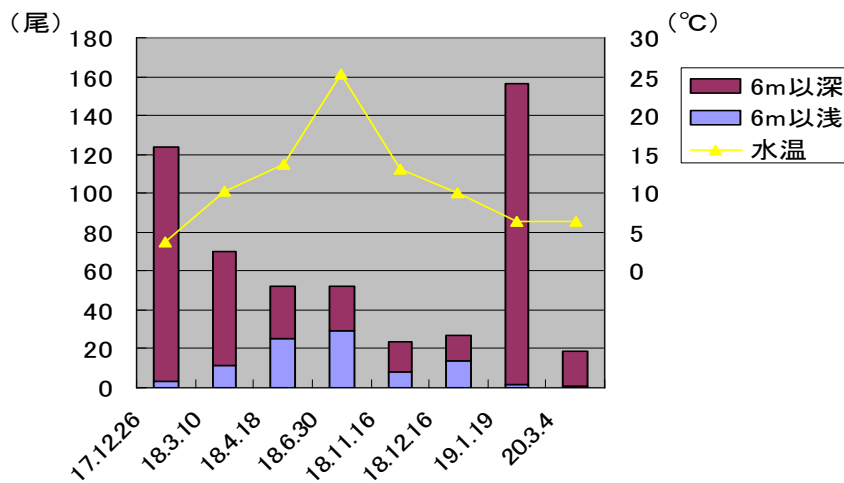


図3. 水深による採捕尾数

[発表及び関連文献]

利根川下流域におけるチャネルキャットフィッシュの漁獲実態, 千葉県水産総合研究センター研究報告, 第2号, 2007年

[その他]

移入種管理方策検討委託事業(水産庁)「課題名: 利根川下流部におけるアメリカナマズの生態と在来魚への影響」

なお, 本種は外来生物法において特定外来生物に指定されており, 生きたままの移動や飼養等は原則禁止である。